

《征稿》暮色垂櫻

——3月11日大震災后月余,某日黄昏
仍有余震,櫻花摄影有感。

沐浴在暮色中的垂櫻,犹如婉丽少女,披着霓虹色柔幔轻纱,泛着梦幻般的迷人色彩,给人以无限遐想,诸多希望在心中冉冉升起。

婀娜柔韧的櫻的枝条婆娑起舞,那不是风的吹拂,而是地的震撼。因为那苍劲的树干在晃,树下依然是满目疮痍。

刚刚经历的一场浩劫、恍如世界末日;地动山摇、排山倒海、吞噬着绵延数百里的一切生机,擎天地泣鬼神。

当惊魂未定的人们尚未拭去悼念族人的泪水,那华盖如升的櫻树又见花季,櫻花烂漫依旧笑春风。暮色中,櫻树前,一股热流在心中涌动,我为那美幻绝伦而陶醉。

燦然开放的櫻花,抚慰着人们心灵上的伤痛,并向世人披露,在空前的全人类的灾难面前令世人敬佩的从容镇静。櫻花绽放着亘古至今的美,是坚韧不屈的精神的像征,是复兴家园的勇敢的升华。铭刻在心的不仅是伤痛,历史的这一页,将记录的是复兴的篇章。

(K)



《投稿》夕暮れ色の枝垂れ桜

—3月11日の大震災後、まだ起こる余震の中、ある黄昏時に桜の花をカメラにおさめて

暮れなずむ夕日を浴びて枝垂れる桜は、まるで穏やかで美しい少女が軽くて柔らかな虹色のスカーフを広げるようだ。夢幻のように人を惑わす色彩が、人を無限の空想へいざなう。多くの希望が心の中にゆっくりと沸きたつ。

柔らかくしっかりした桜の枝が美しく軽やかに舞い上がる。風が吹いているわけではない、大地の震撼だ。あの老木の幹もまた揺れている。木の下は依然至る所破壊の後ばかりである。

たった今起きた壮絶なあの瞬間は、全くもって世界の終りのようであった。地面が動いて山が揺れ、海に崩れ落ちて、数百里と続く一切の生命を呑み込みながら、大地を支える神が泣いていた。

驚愕おさまらぬ人々が尚も見失った家族の姿をあきらめずにいる頃、それが不運の兆しのように花の季節を迎え、桜の花が爛漫と咲き、春風に笑う。暮れなずむ中、桜の木の前で熱い思いが心を動かし、並外れた桜の美しさに心酔する。

燦然と花開く桜は、人々の心の痛みや傷を慰めながら、美しさを披露する。人類空前の災難を前に、人々を敬服させる桜の沈着冷静な姿。桜の花が古から現代まで放つ美しさのように、頑なで不屈の精神を象徴するようであり、復興への勇気へと昇華する。心に刻まれたのは痛みだけでなく、歴史の一ページに記録される復興の物語だ。

(K)